

まず二島返還の道を

東京外国語大教授

中嶋 なかじま

嶺雄 みねお



ゴルバチョフ体制のソ連がスタートしてから、もう一年が過ぎた。この間、ソ連の変化はきわめて大きかった。政治的にはブレジネフ時代以来のリーダーシップの硬直化とジェコントクラシー（老人支配体制）を一挙にくつがえし、経済的には、科学技術革命と生産の効率化を求めて大胆な改革に着手しはじめた。

ゴルバチョフ書記長は、みずから「現実主義」という言葉を頻用して内外情勢に対応しようとしており、また、過般のソ連共産党第二十七回大会を「スターリン批判」を敢行した二十回大会の三十周年目に合わせて開催するなど、ソ連の新しい転換への並々ならぬ意欲を感じさせずにはおかない。しかも、従来のソ連は、対外的にはなにをやるにも、宿敵・中国の存在に拘束され、中国に足をひっぱられてきたのだが、その中国とは最近著しく関係を改善した。中国の指導者自身、従来のようなソ連脅威論からもはや完全に脱しているだけに、ソ連の行動余力はこの点でも大きくなっていると見なければならぬ。

ればなるまい。

もとより、このようなゴルバチョフ路線の展開にもかかわらず、社会主義大国としてのソ連が抱えている社会的・経済的病弊は、あまりにも深刻であつて、一朝一夕に癒やすことなど不可能である。それだけに、対外的にはソフトムードで出ざるを得なくなつてきているともいえよう。

だとすれば、北方領土問題を含む日ソ関係改善のチャンスは増大しつつある、と一般には見られるかもしれない。だが、これまでの日本外交がいわば米中双方の反ソ戦略に乗じて、ソ連の対日依存度を高めるような政策をとつてはこなかっただけに、当面、日ソ経済関係の改善はあり得ても、領土問題の解決は容易なことではないだろう。

そもそも日本外交では、七〇年代末期までの歴史的な中ソ対立を外交的に利用することを怠り、おそらくもう二度と訪れることのない、あの深刻な中ソ対立という千載一遇のチャンスを見送つてしまった。それどころか、一九七八年の「覇権」条項入り日中平和友好条約の締結に見られるように、一方的に中国側に傾斜して、日本の対ソ・バーゲニング・ポジションをみずから損なつてきたのである。

このような経緯を顧みると、残された日本側のシナリオとしては、領土問題は存在しないと主張し続けるソ連に対して、まず二島返還という「譲歩」（本来、日本の立場からすれば、ソ連の「譲歩」どころではないのだが）をとりつけて妥協し、残りの二島については、あくまでも領有権は主張しつつ、共同利用か共同開発、もしくは二島買い取りへの道を探ることがもつとも現実的であろう。さもなく

れば、永遠に四島返還を主張しつづけて時間の経過を待つ以外にない。この二つに一つしか基本的な選択肢はないのではないか。ソ連は既成事実をつくって譲らない国だから、もしも北方領土問題の解決が二十一世紀まで延びれば、半世紀以上もたった領土問題を外交交渉で決着することなどますますむずかしくなるだろう。だとすれば、日ソ外交はいよいよ時間とのたたかいかにもなってくるのだ。

わが国は残念ながら第二次大戦で負けたのだという冷徹な事実を直視し、しかも二十一世紀には、さらに大きく成長し、繁栄する平和国家・経済大国だという自信をもって、今後の対ソ交渉に臨むべきである。そのような日本との正常で活力ある関係を欠いては、ソ連の経済的発展も、科学技術革命を柱とするゴルバチョフ改革もあり得ないのだ、という認識をソ連側に植えつけてゆかねばならない。

昭和四十年、東大大学院国際関係論課程修了、社会学博士。五十二年東京外語大教授。この間、在香港外務省特別研究員、オーストラリア国立大・パリ政治学院客員教授などを歴任。現代中国学を専攻、主な著書に「中ソ対立と現代」「北京烈々」など多数。昭和十一年、長野県松本市生まれ。

言葉聞き、知り合おう

作家 野坂のさか

昭如あきゆき



ぼくは神戸に育った。隣近所に、朝鮮韓国中国独逸英国米国人がざらに居た。他に白露と呼ばれる連中をよく見受け、彼等がどこに住んでいるのかについて心得なかったが、恵まれた暮しぶりではないように思えた。いうまでもなく白露は、革命を逃がれ日本へ移り住んできた人たち。彼等は、羅紗つまり毛織物を担いで行商に歩き、また、大柄な体格威厳のある風貌をかわれ、ホテルの門番に雇われると聞いた。そういった姿を実際に見た覚えはない。ぼくの眼にしたのは、老人夫婦の散策、バラライカを弾きつつ唄う大道芸人、語学の個人教師の煙草を吸う姿などで、その印象はしごくとりとめない。

ところが、気がついてみると、白露と、今のソ連人を一緒にしちゃいけないのかもしれないが、とにかく、あの国に生まれた人の姿を身近かにしたのは、この神戸時代がいちばん、狸穴に住んだことがあり、大使館員の出入り、新潟港に入ったソ連船の船員を、そりやみたけれど、まことに遠いとい

北の隣人—日ソ国交回復30年—

定価 980円

昭和61年10月15日 発行

編者—北海道新聞社

発行者—阿部 香作

発行所—北海道新聞社

〒060 札幌市中央区大通西3丁目

電話 (011) 221-2111

印刷・
製本所—株式会社共同印刷

©1986, Hokkaido Shinbun-sha

ISBN4-89363-473-9 C0031 ¥980E

●落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

●日ソ国交回復30年

北の隣人

北海道新聞社編

I きずなを求めて

よみがえる記憶	6	ある執念	13
近くて「近い」国	19	地の塩	25
「黒船」騒動	30	ロシア語はいま	36
小さな懸け橋	41	民衆とのふれ合い	47
はるかなアンガラ	53	ここが好き	58

II 不信を越えて

モスクワから	66	かみ合わぬ言葉	72
米ソ戦路のはざま	73	目には目を	84
揺れるソ連研究	90	変身花嫁のマチ	96
消えた男	102	ゲリラ商法	108
友好への模索	114	変わる人脈	120

III ソ連で考える

リガの街角で	128	日本ファイバー	136
文豪の末裔	140	「ターニャ源氏」	148
知日家群像	152	軍服の論理	156
グルジア流日本	160	経済デタント	164
企業戦士の憂うつ	168	がんばれ枯里君	172

IV シリーズ評論・日ソ交流を考える

大衆同士で気さくに	180	山之内滋美	179
基礎的知識の教育を	183	長谷川 毅	180
冷静に現実見つめよ	186	袴田 茂樹	186
公教育でロシア語を	189	小山内道子	189
存在せぬ軍事的対立	192	小一 和久	192
今こそ軌道修正の時	195	北構 保男	195
まず二島返還の道を	198	中嶋 嶺彦	198
言葉聞き、知り合おう	201	野坂 昭如	201